歌日本紀行　第5回　「タイガー&ドラゴン」（クレイジーケンバンド）

ダサいスカジャンで待つ横須賀

70～80年代の横浜、横須賀では、若者たちがそれぞれの想いを抱えてクルマを走らせていた。『タイガー&ドラゴン』のなかで綴られる横須賀の「ダサかっこいい」街の空気を思い出してみる。

『万葉集』の時代から昭和ムード歌謡、ひいては、ゆるキャラとこどもたちが歌う「企画ものご当地ソング」まで。歌が土地を元気にし、土地が歌を元気にする。歌でニッポンを巡る連載の第5回は『タイガー&ドラゴン』。横山剣さんの謳ったちょいワルの舞台とその時代背景に迫る。

『タイガー&ドラゴン』がリリースされたのは2002年（平成14）のことだった。謎多き「ちょいワル」風の2人の男が横須賀を舞台に、その詩の世界に登場する。もともとは、和田アキ子さんが歌うことをイメージして作ったと言われているだけに、昭和歌謡風の歌い方とムード溢れる曲調がなんともたまらない名作だ。脚本家の宮藤官九郎氏はこの曲に着想を得て、のちに長瀬智也主演の同名のテレビドラマを書き下ろしている。

戦艦三笠と東郷平八郎司令官の銅像がある三笠公園。

歌詞の中にある三笠公園は、海沿いにある横須賀の代表的な公園である。米海軍横須賀基地に隣接し、公園からは横須賀の軍港としての表情が感じられる。また公園内には、日露戦争の日本海海戦で、東郷平八郎司令官が乗船し旗艦として活躍した戦艦三笠が保存されている。

近くの船着き場（三笠桟橋）からは、今隠れた観光スポットとして話題の「東京近郊の無人島」、猿島へのフェリーが運行している。

みなと横浜とみなと横須賀。このふたつの街は国道16号でつながれている。

古くは、ダウンタウンブギウギバンドの『港のヨーコ・ヨコハマ・ヨコスカ』で歌われたように、他地域からは、わりと同じようなイメージで語られることも多い。

地理的にはいちおう隣接しているが、海に沿っての縦長の配置のせいか、それほどの結びつきがあるようには思えない。いや、横浜出身の筆者の生意気な弁明をお許しいただくならば、横浜の人間は（表面上）横須賀にそれほど興味はないし、また横須賀の人間も別に横浜に用事はない。それぞれたがいの地で用が足りているから、（たがいに認め合ってはいるものの）擦り寄ることはない、そんな気分なんだと思う。

だが、そうは言っても、時は1970年代～80年代。若者のクルマ文化も盛んだった頃、横浜や横須賀の人間は、夜な夜なこの国道16号を走り回った。

比較的空いた夜半に仲間とつるみ、手に入れたばかりのクルマのカーステレオで「ごきげんな」音楽を流しながら、横浜の本牧に溜まり、横須賀の海沿いを流し、観音崎の灯台や三浦海岸周辺の三戸浜などを目指す。馬鹿笑いや喧嘩は絶えず、若者たちの好奇心も、一晩中眠ることはなかった。

女の子を連れたデートも、そりゃたまにはあったけど、なんとなく現状に不満を募らせている男同士が、ただ黙ってクルマのフロントガラスを見つめている、そんな夜も多かった。

横須賀という地のどこかで知人を想う。それは親友の男かもしれないし、ワケアリの女なのかもしれない。この短い空想世界の詩のなかで、横須賀というややこしくも「ダサかっこいい」街の空気が漂う。

横浜ではカッコつけすぎて言えなかった、あるいはできなかったことが、ここ「ドン突き」の横須賀の地ではできそうな気がする。夜、街を走ってみればわかる。横須賀は、横浜ほど灯りのない、静かでゆらゆらと揺れる電気海月のような土地だ。

休日の横須賀軍港クルーズでもいい、いまやすっかり観光スポットと化したどぶ板通りでファッションアイテムを漁るのでもいい。あの頃を思い出すために、ぜひ一度、横須賀を訪れてほしい。

（中丸謙一朗）

タイガー&ドラゴン

（作詞・作曲:横山 剣）

トンネル抜ければ 海が見えるから
そのまま ドン突きの三笠公園で
あの頃みたいに ダサいスカジャン着て
お前待ってるから 急いで来いよ

俺の話を聞け！ 5分だけでもいい
貸した金の事など どうでもいいから
お前の愛した 横須賀の海の
優しさに抱かれて
泣けばいいだろう ハッ！

俺の俺の俺の話を聞け！
2分だけでもいい
お前だけに 本当の事を話すから
背中で睨み合う 虎と龍じゃないが
俺の中で俺と俺とが闘う
ドス黒く淀んだ 横須賀の海に
浮かぶ月みたいな
電気海月よ ハッ！

JASRAC 出 1613952-601

戦後、駐留兵士向けのスーベニアショップとして栄えたどぶ板通りは、「ダサいスカジャン」の発祥地である。